

I 2012年度認証評価における指摘事項（努力課題）

該当なし

II 2016年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016年度大学評価結果総評】

生命科学部は生命機能学科と環境応用化学科に加え、最近設置された応用植物科学科の3学科で構成されている。それぞれの優れた制度等を学科間で取り入れ、連携を深めながら学部としての教育体制・手法の充実と向上を図り、自己点検・評価の検証プロセスを有効に機能させている点で評価できる。限られた制約条件の中で大学院の教育研究も含めた教員組織の充実と強化を図っていることは評価できる。

教育内容では、学部のSAプログラムやERP科目、TOEIC-IPテストの活用を進め、一部の専門科目へも英語教育を積極的に取り入れたり、初年次教育やキャリア教育を充実させるなど優れた取り組みと評価できる。また生命機能学科で行われている1,2年次の学生に対する統一テストは、学習達成度を評価するための測定方法や可視化方法の事例として優れた取り組みと高く評価できる。

生命・環境・物質・植物という異なった分野の教育研究を担う生命科学部は、3学科によって担われている。それぞれの学科はほぼ独立して担っているが、今後連携を一層に深め、学部としての評価を高めるための努力を継続して欲しい。

質保証委員会は、学部長、教授会主任・副主任、各学科から選出された委員の6名で構成されているが、厳格なPDCAサイクルが担保される仕組みとなるよう、今後の検討に期待したい。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

生命科学部は2014年度より3学科体制となり、学科間でそれぞれの優れた制度等を取り入れ連携を深めながら、学部として教育体制・手法の充実・向上を図っている。大学院を含めた教員組織では、2017年度に教養教育を担当する教員2名（数学1名、英語1名）、大学院教育に携わる教員1名を純増で採用し、教養教育と大学院教育の充実を図っている。一方で、学生、教員の教育研究のスペース確保や園場の整備などの課題に取り組む必要がある。英語教育では、従来のプログラムに加え、2017年度、学部全3学科の教員が参画するグローバルオープン科目「Introduction to Biology and Chemistry for Sustainability」を開講し、学科間の連携を図りながら、自然科学を英語で教授する試みを開始した。また、新たに学部主催の新任教員セミナー、新任教員歓迎会を実施し、学科間の交流・連携を深める機会を設定した。質保証委員会では、Check（評価）には執行部は関与しないなど、自己点検における執行部会議と質保証委員の役割をより明確に分け、厳格なPDCAサイクルを担保する体制を作った。

【2016年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

2014年度から生命科学部が3学科体制となったことで3学科間の連携を深めて学部としての特色を出していくことが期待されていた点に関しては、それぞれの学科の優れた制度を取り入れることで学部全体の教育体制・手法の充実向上が図られており、評価できる。英語による専門教育に積極的に取り組んでいるが、新たに教養教育として英語教員（全体では数学1名、英語1名、大学院教員1名の計3名）を増員できたことで、今後のより優れた英語教育が期待できる。質保証委員会の構成については、執行部会議と質保証委員会を分離し、厳格なPDCAサイクルが行える体制が確立できており評価できる。

III 自己点検・評価

1 内部質保証

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

①質保証委員会は適切に活動していますか。

はい  いいえ

【2016年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。

- ・生命科学部質保証委員会は、学部長、教授会主任、副主任、および各学科より選出された委員の計6名で構成されている。2016年度の構成は、委員長：山下明泰、委員：廣野雅文、西尾 健、石垣隆正、濱本 宏、水澤直樹である。
- ・開催状況と議題等は下記のとおりである。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

第一回：4月11日（月）  
 議題：委員長の選出・2016年度自己点検・評価活動について  
 第二回：5月16日（月）  
 議題：現状分析シートについて  
 第三回：2月27日（月）  
 議題：年度末報告現状の課題に対する取り組み状況（執行部とりまとめ）・質保証委員による点検・評価  
 第四回：3月7日（火）  
 議題：年度末報告最終案のとりまとめ

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・自己点検作業における執行部会議と質保証委員の役割をより明確に分け、厳格なPDCAサイクルを担保する体制を作った。	1.1①

【この基準の大学評価】

生命科学部の質保証委員会は、従来は執行部と学科主任からなる委員で行っていたが、2016年度には学科主任を委員から切り離し、より客観的に活動が行われるようになった。こうした改善点を含めて、質保証委員会は適切に活動していたと評価できる。2017年度からは新体制として、PDCAのcheck（評価）については執行部会議と質保証委員会とを分離する体制となり、今後はより厳格なPDCAサイクルによる活動が期待できる。

2 教育課程・学習成果

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

生命科学部は、以下の能力を備えた学生に学位を付与する。

1. 英語科目、教養科目、理系教養科目単位を修得し、幅広い知識を有する。
2. 学部内の共通専門科目の履修を通じて生命科学および化学の学際的知識と総合的視野を有する。
3. 専門実験・実習科目を履修し実践的な課題解決能力を有する。
4. 卒業研究、課題研究を履修しコミュニケーション能力、問題解決能力を備える。

各学科の学位授与方針は次の通りである。

生命機能学科：

- (1) ゲノム・タンパク質・細胞を中心とする専門的知識を身につけた上で、生命科学の総合的理解ができる。
- (2) 広い学問的視野、論理的思考能力、実践的な課題解決能力を備えている。
- (3) 日本語、英語を問わずに情報を収集し、自立的に考え、それを論理的に説明できる能力を備えている。

環境応用化学科：

- (1) 化学に関する専門知識の習得とそれを生かした問題解決能力を備えている。
- (2) 化学に関する実験操作を自ら行い、その結果を正當に評価し、論理的な結論が導きだせる能力を備えている。
- (3) 日本語、英語を問わずに豊かなコミュニケーション能力を備え、自らの意見を論理的に説明できる能力を備えている。

応用植物科学科：

- (1) 様々な植物病について、的確に診断・予防・治療できるための専門的知識とその遂行能力が備わっている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- (2) 食の安全や環境についての知識を持ち、植物保護の技術を理解しリスク評価を行える総合的能力を有する。
- (3) 専門教育で得た知識を活用し、さまざまな分野で新しい科学や技術が現代社会に与える影響を自らの力で正しく評価し、その内容の正確な伝達ができる説明能力が備わっている。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

はい  いいえ

2.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

**【教育課程の編成・実施方針】**

生命科学部では、以下の特色を持つ教育課程を編成し、ホームページで公表している。

1. 初年次教育として自立性やプレゼンテーション能力を涵養するための科目を設定する。
2. 英語科目、教養科目、理系教養科目の単位取得を卒業要件に含める。
3. 1年次より専門実験・実習科目を配して、早期より専門性を高める。
4. 学部内で共通履修できる専門科目を設け、専門分野での総合的科学家の見地を養う。
5. 各学科で学生の興味に合わせた専門性をより高めるべく3つの履修コースを設定する。

各学科の詳細な教育課程の編成とその実施の方針は以下の通りである。

生命機能学科：

ゲノム・タンパク質・細胞に関連する科目を中心としてカリキュラムを編成し、生命を、個々の生体分子の機能が統合された現象としてとらえ、深く理解できるような専門科目を配置する。また、三履修コースとして、「ゲノム機能」、「タンパク質機能」、「細胞機能」を設け、学生の興味に合わせて高度な専門性を身につけさせる。全体としては次の点に配慮する。

- ・ 初年次から実験・演習科目を設定する。
- ・ 研究室配属による課題研究・演習の履修を2年次から可能とし、理論・知識と実践的技術の相乗的効果によって高度な専門性の習得を推進する。
- ・ 学部内の教養科目、学科横断的な専門科目の複数の習得を推奨する。
- ・ 教員研修の結果をフィードバックさせ、履修指導や講義の改善を図り、きめ細かく柔軟性のある教育を遂行する。

環境応用化学科：

化学に関する基礎科目を習得したのち、三履修コースを設け、より専門度を高めるようカリキュラムを配置する。三履修コースとして、「物質創製化学」、「グリーンケミストリ」、「環境化学工学」を設け、学生の興味に合わせて高度な専門性を身につけさせるとともに、卒業後選択する職業への指針を与えるよう配慮する。カリキュラム全体としては、次の点に配慮する。

- ・ 全学年に実験科目を配し、化学技術者および研究者としての基礎技術を身に付けさせる。
- ・ 初年次は、高校からの円滑な移行をはかるための教育およびキャリア教育を行う。3年次には卒業研究のための準備教育を行う。4年次には、卒業研究を課し、社会人、大学院進学への準備を徹底するよう、少人数教育に努める。
- ・ 公的資格取得のための教育にも配慮する。

応用植物科学科：

植物、微生物と昆虫に関する、分子・細胞生物学からマクロな生態学まで配置し、併せて食料、環境、社会経済問題まで広範に、総合的な知識を修得可能なメニューを配する。特に、植物保護に関わる技術や資格取得のための知識修得の機会を設ける。三履修コースとして、「植物クリニカル」、「グリーンテクノロジー」、「グリーンマネジメント」を設定する。以下の点に配慮する。

- ・ 実験・実習を初年次から開始して、基礎訓練を行い、その後段階的に高度な診断・防除技術を修得するような実践的で、体系的な教育プログラムを設定する。
- ・ 公的資格（技術士補、樹木医補、自然再生士補）の取得プログラムを配置するとともに、植物関連の食料・環境・バイオ関連の企業・公的機関へのインターンシップを行う。
- ・ 関連する法令や制度、国際動向、関連ビジネスについての知識修得の場を設ける。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p><b>【根拠資料】</b> ※冊子名称やホームページURL等。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学案内</li> <li>・ 学部パンフレット</li> <li>・ 学部ホームページ <a href="http://www.hosei.ac.jp/seimei/">http://www.hosei.ac.jp/seimei/</a></li> <li>・ 生命機能学科ホームページ <a href="http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/">http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/</a></li> <li>・ 環境応用化学科ホームページ <a href="http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/">http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/</a></li> <li>・ 応用植物科学科 <a href="http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/">http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/</a></li> </ul>	
③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>(～400字程度まで) ※検証を行う組織(教授会や各種委員会等)や検証の時期等、検証プロセスを記入。</p> <p>生命科学部執行部会議で適宜検証を行い、必要に応じて教授会に諮ることで教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性を検証している。さらに、各学科において、教室会議を利用してきめ細かい検証を行っている。生命機能学科においては、2016年度に、新カリキュラム(2013年改訂)で学んだ初めての卒業生を送り出した。新カリキュラムでは、専門科目を体系化したことに加え、2年次から必修としていた研究室配属を、2年次または3年次のいずれかから選択できるようにするなどの大きな改訂を行った。現在、これらの改訂がもたらす教育効果について総合的に検証している。環境応用化学科では、年間37回行われた教室会議で議論している。応用植物科学科では、技術士一次試験合格者、樹木医補および自然再生士補登録者を把握することで、教育課程の編成・実施方針の適切性を分析している。また、学生の就職状況を分析し、社会状況の変化と対応について評価・検討している。</p>	
<p><b>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全学で依頼された3つのポリシー見直し作業に従い、生命科学部3学科とも学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を見直し、改訂をおこなった。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 執行部会議・教授会資料</li> <li>・ 各学科教室会議(教員会議)議事録</li> </ul>	
2.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	
①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。	S <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>(～400字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。</p> <p>学生が問題意識をもち、自ら学ぶ自立性を涵養するために、1年次からの実験・演習科目を導入している。学びの意欲を上げるために、各学科とも優秀卒論や資格の合格に対し、表彰を行っている。生命機能学科では、「生物化学」「分子生物学」「細胞生物学」「生物物理学」分野の講義を担当する専任教員が、講義内容を綿密に協議・検討して分担化し、体系的なカリキュラムを設定している。研究に対して高い意欲をもつ学生に対しては、2年次から「ゲノム」「蛋白質」「細胞」のいずれかの分野の研究室に所属し、講義と平行して研究を行うことも可能にしている。希望すれば4年次まで同じ研究室で研究を継続することができる。環境応用化学科では、生命科学部賞を設立して、公的資格試験(採用試験)合格者等を毎年表彰している。基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB, IIAB, 卒業研究および演習科目を各学年に設置し、自律的に学ぶ内容を十分に取り入れている。応用植物科学科では、樹木医補や自然再生士補、技術士補などの各種資格の取得に向けた科目を実施するとともに、公務員受験対策コースの設定やインターンシップを必須科目とするなど、社会が求める人材の育成に努めている。</p>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生命科学部履修の手引き</li> <li>・ 生命機能学科教室会議議事録</li> <li>・ 生命科学部賞募集要項</li> </ul>	
②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。	S <input type="checkbox"/> A <input checked="" type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

(～600 字程度まで) ※カリキュラム上, どのように学生の順次的・体系的な履修 (個々の授業科目の内容・方法, 授業科目の位置づけ (必修・選択等) 含む) への配慮が行われているか。また, 教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか, 概要を記入。

「カリキュラム・ポリシー」に基づき, 各学科では 3 つの履修コースを設定し, カリキュラムマップで順次性を含め体系的な教育課程を明示している。

生命機能学科: ゲノム機能コース, 蛋白質機能コース, 細胞機能コース

環境応用化学科: 物質創製化学コース, グリーンケミストリコース, 環境化学工学コース

応用植物科学科: 植物クリニカルコース, グリーンテクノロジーコース, グリーンマネジメントコース

1, 2 年次において各コースに進むための基盤となる重要な講義科目・実習科目は必修化し, 3, 4 年次における発展的な専門科目は学生の興味応じ選択化するなどの配慮を行っている。専門教育の接続科目として, 物理学基礎, 化学基礎, 生物学基礎, 微分積分学及び演習・線形代数学及び演習, 科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲなどの理系教養科目が適切に配置されている。科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは選択科目であるものの専門科目への導入の役目を果たす重要な教養科目であるが, 環境応用化学科では履修率が過去 5 年間平均 99%と, ほぼ必修に近い扱いとしており, 生命機能学科においても 2 年生から研究室配属を希望する学生には修得を義務づけることにより, ほぼ全員が履修するシステムを作った。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 学部ホームページ <http://www.hosei.ac.jp/seimei/>
- ・ 生命機能学科ホームページ <http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・ 環境応用化学科ホームページ <http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・ 応用植物科学科 <http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・ 生命科学部履修の手引き

③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い, 豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S  A B

(～400 字程度まで) ※カリキュラム上, どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

2012 年度には, 小金井リベラルアーツセンターが設置され, 生命科学部と理工学部の教養教育科目の実施に際して調整等をおこなっている。各学科とも初年次科目を指定し, 幅広い教養が身につくよう配慮している。また, 卒業研究を通して自立性やプレゼンテーション能力を涵養できるようにしている。生命機能学科では, 早い時期から研究室に所属できるというカリキュラム上の特色を生かし, 研究を通して総合的な判断力を育成している。同時に, 研究室におけるコミュニケーションを通して社会性を身に着ける機会を与えている。環境応用化学科では, 1 年次春学期の必修科目「応用化学基礎」を通して教員と学生が密接なつながりをもつことができ, 人間形成に役立っている。さらにチューター制度により先輩学生とコミュニケーションを持つことにより, 教科内容のみでなく, 人間的な学びを行う。さらに, 大学院修了後, 企業で活躍する卒業生との情報交換の機会を定期的に設け, 人的ネットワークの構築を行なっている。応用植物科学科では, 実験実習科目やインターンシップ (2 年次: 必修科目), その他の科目の中で対話型・学生参加型 (インターンシップ体験発表)・問題解決型の授業を実施しており, 総合的な判断力や豊かな人間性を養うことに努めている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 法政大学生命科学部設置の趣旨等を記載した書類
- ・ 各学科教室会議 (教員会議) 議事録
- ・ 応用植物科学科インターンシップ先一覧
- ・ 環境応用化学科キャリア講座案内ポスター, 応用化学基礎シラバス

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。

S  A B

(～400 字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し, どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

初年次教育として, 入学時にプレースメントテストおよび TOEIC-IP テストを実施し, クラス分けを行っている。推薦入試制度を通して入学した学生に対しては, 入学前教育として e-ラーニングの履修を課している。また, 高校で「物理学基礎」「化学基礎」「生物学基礎」を履修しなかった学生を対象に, これらの科目に対応する理系教養科目を開講し, 大学で必要な理科の知識の修得を図っている。生命機能学科では, 1 年次のガイダンス時に, 必修実験演習科目のテキストとして「生命機能学実験の手引き」を配布している。このテキストには, 実験の技術的な内容だけではなく, 生命科学と英語の学習法, 作文技術などについても掲載し, その内容についての講義も行っている。環境応用化学科では, 1 年次の必修科目「応用化学基礎」「応用化学入門」を通して導入教育を行っている。応用植物科学科では, 初年次にレポートの作り方や資料の収集方法など, 基本的な作業について教育を行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

- ・ 生命科学部履修の手引き
- ・ 各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・ 生命機能学科 生命機能学実験の手引き
- ・ 生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表
- ・ 環境応用化学科 応用化学基礎，応用化学入門シラバス
- ・ 応用植物科学科アンケート

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S A B

(～400 字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

夏季および春季の SA プログラムを実施するとともに、定期的に TOEIC-IP テストを実施して、そのスコアを教室会議で評価・議論している。また、2014 年度より ERP 科目を卒業単位として認定（12 単位を上限）した。ERP についてガイダンス等で周知を図り参加を強く推奨している。さらに SGU 採択に伴い、2017 年度より各学科の専任教員が参画するグローバルオープン科目（英語で自然科学を教授する）を設定し、開講した。また、英語による専門科目の設置についても検討を行っている。特筆すべき実践として、生命機能学科では、1 年次（秋学期）～2 年次（春学期）には基礎科学英語を、3 年次（秋学期）～4 年次には科学英語を必修科目として少人数クラスで実施している。基礎英語については TOEIC-IP テストの成績に基づいたクラス分けをすることにより、学生の能力に応じたきめ細やかな教育を行っている。また、来日した海外の研究者によるセミナーを開催し、学部全体に公開している。環境応用化学科では、全教員が英語を取り入れた講義に取り組んでおり、教材・小テストを英語化するなど、国際性を養うための教育に取り組んでいる。応用植物科学科では SA、ERP などの英語教育を積極的に推奨している。その結果、本学科生徒が 2017 年度秋学期派遣留学生（2 名）および第 3 回世界若者農業サミット（ベルギー、バイエルクロップ社主催）に日本代表として選出されている。

【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ グローバルオープン科目として各学科から 5 名の専任教員が参画する「Introduction to Biology and Chemistry for Sustainability I」（2017 年度春学期開講）を設定し、授業プランの作成・準備をおこなった。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 生命科学部履修の手引き
- ・ 生命科学部 ERP， SA の実績， アンケート調査
- ・ 生命機能学科国内外研究者によるセミナー件数
- ・ 応用植物科学科 第 3 回世界若者農業サミット関係書類

⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

(～400 字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入

学生に対して効果的な理系キャリア教育を実施するために、執行部、各学科就職担当教員がキャリアセンターと連携する体制を確立している。学部の理念に掲げる「統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成」を実現するために、キャリアパスの第 1 段階として大学院進学を重視し、各学科独自に大学院進学の奨励やキャリア教育を実施している。生命機能学科では、3 年生を対象に「進学説明会」と「就活説明会」を開催している。進路選択の判断材料を与えるため、研究者・技術者として活躍している大学院修了生に自身の体験を話してもらっている。環境応用化学科では、1 年次の必須科目「応用化学基礎」において、3 回の講義で専門家によるキャリア教育を実施し、社会的・職業的自立に向けた学ぶ意欲の育成を行っている。応用植物科学科では、キャリア教育の一環として、技術士試験対策や、樹木医補、自然再生士補に向けた科目を初年次から受講するように指導している他、「植物医科学ビジネス論」（2 年生）、「植物医科学法論」，「知的財産総論」（3 年生）などの実践的科目を配置している。

【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ 新しい試みとして大学院進学をテーマとした「理系進学ガイダンス」を 10 月にキャリアセンター主催で開催し、生命科学部は「講演内容」の吟味、「学部生への参加呼びかけ」など実施に協力した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 生命科学部履修の手引き
- ・ 各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・ 生命機能学科 生命機能学実験の手引き
- ・ 生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表
- ・ 環境応用化学科応用化学基礎シラバス

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・ 応用植物科学科アンケート		
2.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。		
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S	<input checked="" type="checkbox"/> A B
<p><b>【履修指導の体制および方法】</b> ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入学時の各学科のガイダンス等において、理系教養科目の履修法など、幅広い科学の素養を身につけるためのポイントを丁寧に指導している。</li> <li>・ 生命機能学科では、理系教養科目（化学、物理学、数学等）の積極的な履修を、教務担当教員が中心となって指導している。また、専門科目についてもカリキュラム・ポリシーに基づいた3つの履修コースの履修モデルを提示している。</li> <li>・ 環境応用化学科では、理系教養科目（化学、物理学、数学）の積極的な履修を指導している。また、「応用化学基礎」の講義において1年生に各自の履修登録予定表を教員に提出させて、履修指導に関するきめ細かな指導をしている。さらに、留級生には4月に別途ガイダンスを行い、きめ細かい履修指導を実施している。</li> <li>・ 応用植物科学科では、各学年に対して2名ずつの教員を「学年担当」として配置するとともに、チューター制度を活用することによってよりきめ細かい履修指導を実施している。</li> </ul> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学科ガイダンス資料</li> <li>・ 生命科学部履修の手引き</li> <li>・ 環境応用科学科履修登録予定表</li> <li>・ 環境応用化学科応用化学基礎シラバス</li> <li>・ 応用植物科学科役割分担表</li> </ul>		
②学生の学習指導を適切に行っていますか。	S	<input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。</p> <p>生命科学部では、全専任教員がオフィスアワーを設定して学生の個別指導に当たるとともに、各学科に学生問題担当教員をおき、成績不振学生等の調査・対応を主導している。生命機能学科では、1～3年生の各学年の担任教員および基礎実験演習担当教員を設定し、基礎実験、演習科目等の実践的教育を行う際の、学生の学習上の問題に対応している。卒業研究については、学生の研究の進行度に合わせて成果発表を口頭またはポスターから選択できるようにし、論理的な説明法の習得と、多くのディスカッションを通じた論理的思考能力の育成を行っている。環境応用化学科では、「応用化学基礎」の時間やオフィスアワーを用いて、きめ細かに学習指導を行っている。また、特任教員技術員は、分担して主要講義科目、実験科目および演習科目に出席し、その教育内容を把握しており、教員だけでなく特任教員技術員も学生からの質問に対応できる体制を整えている。応用植物科学科では、オフィスアワーを用いた個別指導のほか、成績不振者については教員会議で情報を共有するとともに、学生問題担当教員が優先的にケアしている。また、各学年の実験実習科目の指導は学年担当の特任教員技術員（4名）が実験技術指導を担当するほか、全学年を通じて教育技術嘱託（1名）が植物栽培管理指導を行う体制をとっている。</p> <p><b>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新規の授業形態として、卒業論文発表に際してポスター発表形式を導入した（生命機能学科）。</li> </ul> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生命科学部履修の手引き</li> <li>・ 生命機能学科 各種委員リスト、ガイダンス資料、卒業論文発表会プログラム</li> <li>・ 生命機能学科教室会議（教員会議）議事録</li> <li>・ 基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB, IIAB テキスト</li> </ul>		
③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。	S	<input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。</p> <p>生命機能学科では、1, 2年次の基礎実験・演習・科学英語の科目において、統一テストを行い、各自の達成度を学生に認知させ、予習・復習の指標を提示している。環境応用化学科では、各年次の学習時間（予習・復習）が偏らないように配慮している。特に専門科目において毎回宿題を課す、講義開始前に前回の講義の内容の小テストを随時行うなど予習、復習を行わせる工夫をしている。また、各科目で授業支援システムを活用し、授業に関連した資料を授業の前後で学生に配布するなど授業の予習・復習が行える様、十分に配慮している。応用植物科学科では、学生実習以外の時間帯において実験室や調査作業室などを開放するとともに、教員や学科が保有する専門図書を閲覧可能として、予習・復習が可能な学習環境を整えている。</p> <p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p>		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・ 生命機能学科 生命機能学実験の手引き
- ・ 生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II のアチーブメントテスト（統一テスト）
- ・ 生命機能学科基礎英語 I/II のアチーブメントテスト（統一テスト）
- ・ 有機化学 I・II シラバス

④1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。

はい いいえ

**【履修登録単位数の上限設定】**※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位数の上限を記入。

春学期、秋学期各々について 30 単位を超えて履修登録することができない。2014 年度以降の入学生は、年間の合計が 49 単位を超えて履修登録することができない。

ERP、グローバル教育センター主催科目、グローバルオープン科目は自由選択科目として、卒業所要単位数に算入するが、12 単位を超えて履修・修得することができない。

**【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】**※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。

科学技術コミュニケーション演習、および卒業要件とならない教職科目や資格科目は、履修制限の対象外となる。2 年次以上の成績優秀者は、他学部科目履修者制度により、年間 4 科目（かつ）8 単位以内を上限として本制度に参加している学部の対象科目を履修することができ、この範囲であれば、例外的に上限を超えて履修登録することができる。

**【根拠資料】**※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 生命科学部履修の手引き

⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。

S A B

**【具体的な科目名および授業形態・内容等】**※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。

- ・ 生命機能学科では、新カリキュラムによって研究室配属を 2 年次または 3 年次から選択できるようになった初めての学生を送り出すにあたり、2 年次から配属された学生には「生命機能学研究論文」の履修と口頭による卒業研究の成果発表を課し、3 年次から配属された学生にはポスターによる成果発表を課した。これにより、卒業研究全体のレベルを落とすことなく、学生の意欲に応じた高い専門教育が行えるようになった。また、ポスター発表形式を導入した事により、他学科の教員を含めた多くの聴講者を集めることになり、広い学問的視野の育成に効果が期待できるようになった。
- ・ 環境応用化学科では、講義科目と実験科目の関連性を検証している。予習や復習がいつでも行えるオンデマンド型の講義体制を取り入れることを目指して授業支援システムを活用している。
- ・ 応用植物科学科では、1 年生の学生実習において全員参加型の課題発表会、2 年生では必修科目として全学生にインターンシップを実施、3 年生では自ら研究計画を立て自主的に病害虫の診断を行う問題解決型の実習を実施するなど、学生参加型・対話型の教育を数多く取り入れている。
- ・ 応用植物科学科では、2014 年度開設した植物医科学センターの実践的な活動（植物病害虫診断事業）を 4 年次の卒業論文研究に生かすことで、問題解決能力に加えて、主体的に考える能力や社会的能力を育成する試みを行っている。

**【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】**※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・ 各学科とも、講義、実習、卒業研究など科目スタイルに応じて、教育目的をより効果的に達成できるように、多様な形態の授業を実施した。

**【根拠資料】**※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 生命科学部履修の手引き
- ・ 生命機能学科 ガイダンス資料、2016 年度卒業論文発表会プログラム
- ・ 生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表
- ・ 環境応用科学科授業支援システム利用の試み
- ・ 環境応用化学科教室会議議事録

⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1 授業あたりの学生数が配慮されていますか。

S A B

(~400 字程度まで) ※どのような配慮が行われているかを記入。

生命機能学科では、基礎科学英語において能力別に 18 人程度以下の少人数クラスを編成している。また、基礎実験では 10 人以下の班に分けて実験を行わせている。研究室への配属にあたっては、各研究室に最大でも 10 名以下になるよう配慮し、各学生に個別の研究テーマを与えて指導をしている。環境応用化学科では 1 年次の導入教育および 3 年次の卒業研究プレゼミにおいては教員によるきめ細やかな指導を行うため 1 クラス 8 名程度の学生数で授業を実施している。また、実験科目においては安全面や学生が自律的に学ぶ教育内容を担保するため 1 テーマあたりの学生数を 8 名程度に絞っている。応用植物科学科では、実験科目においては 1, 2, 3 年生が自主的、創造的に学べるように多様性に富んだテーマを選定

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

し、実験台当たりの学生数を最大7名以下に調整している。また、研究室の配属においては、研究室当たり、最大でも9名以下になるように配慮している。卒業研究テーマは、学生の自主性を重んじつつ、個々に卒業研究テーマを選定し、学会発表を目指して指導している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 生命機能学科教室会議議事録
- ・ 環境応用化学科 基礎応用化学実験, 応用化学実験 IAB, IIAB テキスト, 応用化学基礎・応用化学セミナーシラバス

⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。

はい  いいえ

【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。

- ・ 生命機能学科では、2014年度より専任教員担当科目のシラバス原稿をウェブ上で閲覧する体制を構築し、相互チェックを実施している。2015年度と2016年度には、専任教員と兼任講師がそれぞれ担当する科目の内容の適切性を検討するために懇談会を実施した。
- ・ 環境応用化学科では、2014年度より教室会議で主要科目についてシラバスの記載内容をチェックし、常に検証する体制を取っている。また、兼任講師が担当する科目については、採用時にシラバスの提出を求め、教室会議にて記載内容を検証している。
- ・ 応用植物科学科では、2014年度より教室会議で全科目についてシラバスの記載内容をチェックする体制を取っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・ シラバスチェックの結果をまとめた執行部会議メンバー内でのメール文書

⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。

はい  いいえ

【検証体制および方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。

- ・ 学期末に実施される授業改善アンケート（FD推進センター）に、授業がシラバスの記載に沿って実施されているか、確認する項目が設定されている。
- ・ 生命機能学科では、授業改善アンケートのシラバス関係の項目の結果について教室会議で検証している。
- ・ 環境応用化学科では、専任教員の担当する授業科目に関して、学期毎にシラバス通り授業が行われたかの指標としてシラバス合致度をチェックし、シラバス合致率80%未満の科目については担当教員にその理由の説明を求めている。
- ・ 応用植物科学科では、授業の初回に学生にシラバスを提示して授業を進めるとともに、授業改善アンケート中の、シラバスの内容が反映されているかどうかの項目に対する回答を検証することで改善を図っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録

## 2.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。

S  A B

【確認体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・ 成績評価の方法および基準は、期末試験や小テストなどの各要素の配分も含めてシラバスに明記され、学生へ周知されている。これらをもとに、授業の内容に応じて適切な単位認定が行われている。
- ・ 成績評価結果については、学生からの異議申し立てが可能であり、そのシステムも確立されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 生命科学部履修の手引き
- ・ 授業科目シラバス

②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。

はい  いいえ

(~400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

現在は行われていない。近隣他大学との単位互換制度を望む意見もあり、実施に向けて、引き続き具体的な議論が必要である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 特になし

③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。

S  A B

(~400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

現在のところ、講義科目については概ね各教員に任せられているが、成績評価方針を学生の個人情報の問題をふくめて検討する必要がある。生命機能学科では、全教員が担当する研究・実験・演習・科学英語科目については、予め学生に公表

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

した基準に沿って学習態度や達成度等を点数化し、教室会議できめ細かく検討した上で成績評価を行っている。環境応用化学科では1年次の導入教育科目および実験科目に関して、厳格な採点基準を設け、採点を行い、最終的には教室会議で詳細に検討し成績評価をしている。応用植物科学科では、特に実験・実習科目の成績評価について教員会議の中で話し合われて全教員が確認している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・授業科目シラバス
- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録

④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい  いいえ

【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・生命機能学科では、就職担当教員が学生の卒業後の進路について適宜調査し、教室会議における報告を通して、進学状況および就職状況は、全専任教員に共有されている。
- ・環境応用化学科では、学生の卒業後の進路についてゼミ単位で、就職担当教員が適宜調査し、教室会議で報告し、就職状況および進学状況は全専任教員が把握している。
- ・応用植物科学科では、3年生は夏休み前に研究室に配属され、担当教員はゼミ学生の就職内定や進学情報をリアルタイムで把握している。この情報は進路担当教員に報告し、集約された進路情報は卒業までの間に毎月学科全教員に伝達するシステムをとっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・各学科進路調査

2.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい  いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・生命機能学科では、実験・演習・科学英語の成績について、全教員が参加する教室会議において、成績分布に配慮しつつ協議した上で判定している。また、学期末と年度末には、特に修得単位が少なく進級が危ぶまれる学生や、成績の低下した学生を抽出して個別に指導している。
- ・環境応用化学科では、実験科目について、成績分布について検証し、全教員による成績判定を行っている。また、教室会議で行われている授業報告により、各科目の成績分布の様子は全教員で情報共有を行っている。さらに年度末の教室会議では、進級や卒業について、全教員により提供された情報を基に検討しており、十分に把握している。
- ・応用植物科学科では、実践的教育の要である実験科目について、全教員による成績判定を行っているほか、樹木医補、自然再生士補の認定養成機関であることから、資格取得に必要な科目の履修状況を常時把握・指導している。進級や卒業については、提供される情報を基に、教室会議で検討し個別指導している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録

②学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握・評価していますか。

S  A B

(～400字程度まで) ※取り組みの概要を記入 (取り組み例: アセスメント・テスト, ルーブリックを活用した測定, 学修成果の測定を目的とした学生調査, 卒業生・就職先への意見聴取, 習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等)。

生命機能学科では、1～2年次の実験・演習・科学英語については統一テストを行い、各学生の達成度を測っている。2～4年次に各研究室で取り組む課題研究では、その集大成となる「卒業論文」について、全専任教員が全ての口頭発表を審査し、判定会議において評価を決定している。環境応用化学科では、授業科目の到達目標に関しては、学期末定期試験において評価を行う。学期末定期試験が実施されない科目に関しては、授業時間内に課題を課し、回答結果を元に毎回評価を行うなどの方法により、学生の学習成果の測定を行っている。さらに、集中講義科目においては、授業時間内や授業終了後の一定期間にレポートを課すなどして適宜評価を行うことによって達成度評価を適切に行っている。応用植物科学科では、GPAやTOEICの年次比較のほか、実験・実習科目におけるレポート内容の確認・比較を行っている。また毎年、技術士一次試験合格者、樹木医補・自然再生士補の資格取得状況、学生による学会発表などを確認している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・各学科卒業論文発表要旨集
- ・生命機能学科統一テスト

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

・ 応用植物科学科 技術士第一次試験合格者数、樹木医補、自然再生士補登録者数	
③学習成果を可視化していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p><b>【学習成果可視化の取り組み】</b> ※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成，統一テストの実施，学生ポートフォリオ等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生命機能学科では，1～2年次に実験・演習・科学英語に関する統一テストを行い，定量性をもつ達成度として可視化している。また，学生による学会発表を推奨し，学会発表数を教育成果の一つとしており，2015年度より制定された理系学部学生国内学会発表補助を積極的に利用している。</li> <li>・ 環境応用化学科では，学生の専門科目の理解度，キャリア教育による学生意識変化等についてアンケートを継続して行い，学習成果の可視化を行っている。</li> <li>・ 応用植物科学科では，年度ごとに技術士一次試験合格者数，樹木医補・自然再生士補登録者数を把握して，年次変動を確認している。また毎年度末には，教室会議において，学生の単位取得状況に関するデータを基に，学生指導に関する検討を行い，その方針に則った指導に全教員が取り組んでいる。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録</li> <li>・ 応用植物科学科 技術士第一次試験合格者数，樹木医補，自然再生士補登録者数</li> </ul>	
2.7 教育課程及びその内容，方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また，その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し，その結果をもとに教育課程およびその内容，方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400字程度まで) ※検証体制および方法，改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生命機能学科では，入学時のプレースメントテストとTOEICの成績を，1，2年次の基礎実験・演習・科学英語科目で実施する統一小テストおよび期末テストの結果と比較・分析し，教育効果について議論・検証している。また，3年次の実験・演習・科学英語科目について学生にアンケートを行い，教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。</li> <li>・ 環境応用化学科では，ほぼ毎週開かれる教室会議で教育内容，実施の問題点や教育成果について継続的に検証している。さらに，兼任講師懇談会を年1回開催し，兼任講師の担当講義科目についても教育成果について検証し，教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。</li> <li>・ 応用植物科学科では授業改善アンケート以外に学科独自のアンケート調査を実施し，教員会議で結果を分析している。また，毎月2回程度開催される教員会議の中で，試験の成績や資格取得者数など教育成果に関する情報を共有化し検証しているほか，学業不振学生について原因の分析，保護者面談の実施を含めた対策を定期的に議論している。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録</li> <li>・ 生命機能学科アンケート調査</li> <li>・ 環境応用化学科 化学系教員懇談会議事録</li> <li>・ 応用植物科学科アンケート調査</li> </ul>	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p><b>【利用方法】</b> ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業改善アンケートの自由記述欄の詳細情報開示請求により，学部執行部が学部の全専門科目について，授業の実施状況を確認している。</li> <li>・ 生命機能学科では，学科独自の授業アンケートを実施し，集計結果を授業の検証と改善に役立てている。また，全学の授業改善アンケートの結果についても活用するよう各教員に確認している。</li> <li>・ 環境応用化学科では，毎年4月に独自に1年生に対し，新入生アンケートを実施している。さらに，春秋学期の全学授業改善アンケートの集計結果を解析し，学生の気質や，授業に対する興味や，理解度を知るための一つの手がかりとして活用している。</li> <li>・ 応用植物科学科では，教員が学期の終わりと次の学期の初めの間に授業改善の目安として用いているとともに，学生の意見を取り入れて授業の改善に役立てている。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録</li> <li>・ 生命機能学科アンケート調査</li> <li>・ 環境応用化学科アンケート調査</li> </ul>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し，回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は，前年度から「S：さらに改善した，A：従来通り，B：改善していない」を意味する。

## (2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"><li>2016年度は全学科シラバスチェックを兼任講師の科目についても拡大して実施した。</li><li>2016年度は兼任講師との懇談会を全学科で実施し、指導内容の確認、学生指導上の問題点の情報交換などをおこない、専任・兼任教員の連携を深めた。</li></ul>	2.4⑦ 2.7①

## (3) 現状の課題・今後の対応等(必須項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。

<ul style="list-style-type: none"><li>2014年度から3学科体制となったことに伴い学生数は増えたが、教育研究に使用できるスペースはまったく増えていない。さらに、2017年度には新規に2名の教養教員と1名の大学院教育に携わる教員が増え、スペース不足が深刻化している。学部創設以来の課題である応用植物科学科の圃場の確保も含め、充実した教育研究環境を提供する方策を検討する。</li><li>推薦入試(指定校、付属校)を利用して入学した学生の中に基礎学力の足りない学生がしばしばみられる。これらの学生に学部専門教育を受けるのに必要な基礎学力をつけさせるため、入学時、もしくは入学後早期に、リメディアル教育および教養教育を実施・強化することを検討する。</li></ul>
---

## 【この基準の大学評価】

### ①方針の設定に関すること(2.1～2.2)

<p>生命科学部の学位授与方針として、「教養面および専門分野における幅広い知識、コミュニケーション能力と問題解決能力を備えること」などが、明示されている。学科ごとにもそれぞれ詳細に方針が設定されており、適切である。</p> <p>教育課程の編成・実施については、英語をはじめとする教養科目にも力を入れるとともに、初年次から専門実験・実習科目を設けて専門性を高める編成とすること、さらに、専門性をより高めるために、学科ごとにそれぞれ3つの履修コースを設けることが方針として設定されている。</p> <p>これらの方針は、ホームページで公表されている。また、各学科においてきめ細かな検証作業が行われるとともに学部執行部においても適宜検証が行われ、必要に応じて教授会での検証も行われている。</p> <p>応用植物科学科においては、技術士一次試験合格者数や樹木医補および自然再生士補登録者数による定量的な分析も行われており、その分析結果が学生の受験への促進に活用されている。</p> <p>以上のことから教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針等が適切に設定され、その検証も行われていると評価できる。</p>
---

### ②教育課程・教育内容に関すること(2.2)

<p>生命科学部では、1年次から実験・演習科目を導入して学生の「自ら学ぶ」自立性を涵養するとともに、優秀な卒論や資格合格者に対する表彰制度が導入されている。学科ごとにも、2年次から専門分野の研究室に所属できる制度を設けたり、公的資格試験等の合格者の表彰が行われている。これらは、学生の学習意欲を高めるための取り組みとして評価できる。1、2年次においては、専門教育への接続科目として、英語や理系科目を含む教養科目が配置されるとともに、その後の基盤となる重要科目は必修化し、3、4年次の発展的専門科目の履修に備えるといった順次性・体系的性が確保されている。また、各学科それぞれが3つの履修コースを用意し、学生の興味に応じた選択ができるといった柔軟性も確保されている。教養教育は小金井リベラルアーツセンターによる調整のもとに行われており、幅広い教養や自立性、プレゼンテーション能力が身につくように配慮されている。また、各学科においても、早期の研究室所属制度(生命機能学科)、必修科目「応用化学基礎」(環境応用化学科)、実験科目やインターンシップ(応用植物科学科)などにより、コミュニケーション能力の向上や総合的な判断力、豊かな人間性を養うことに努められ、さらにTAやチューター、学年担任による個別指導の体制が整えられており、評価できる。</p> <p>また、入学時のプレースメントテストおよびTOEIC-IPテストに基づいたクラス編成を行うなど、初年次教育・高大接続が配慮されている。学生の国際性を涵養するための教育については、SAプログラムの実施やERP科目の卒業単位認定、海外研究者によるセミナーや英語を取り入れた講義への取り組みなどにより、適切に行われている。キャリア教育についても大学院進学を重視しつつ、専門家によるキャリア教育科目の実施、資格試験対策といった科目が提供されるなど、適切</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

なキャリア教育が提供されている。

### ③教育方法に関すること (2.4)

生命科学部では、入学時に学科ごとのガイダンス等を中心に履修指導が行われている。また、学科ごとに教務担当教員(生命機能学科)や学年担任(応用植物学科)によるきめ細かな指導や学生に履修登録予定表を提出させた上での履修指導(環境応用化学科)をするなど、適切な履修指導が行われている。学習指導については、全専任教員によるオフィスアワーを利用した学生の個別指導のほか、学生問題担当教員や学年担任教員を置くなど、学生の学習上の問題に対応する体制が適切に整えられている。

学生の学習時間を確保するため、学科ごとに、1、2年次の一部科目における統一テスト、専門科目における授業開始前の小テスト、空き時間における実験室等の開放などにより、学生が継続的な学習を行うための工夫が行われており、適切に取り組みが行われていると評価できる。履修登録単位数については、各学期30単位、年間の合計で49単位を超えないよう履修登録が制限されている。履修登録制限を超えて履修する場合の措置も適切に設定されている。新たな授業形態の導入に関しては、卒業研究などでプレゼンテーションを重視した授業形態をとり入れているほか、授業支援システムを活用したオンデマンド型の講義体制も取り入れられている。

1授業あたりの学生数に関しては、英語や基礎実験などでは少人数の編成で授業を行うよう配慮されている。適切なシラバスの作成については、専任教員の担当科目についてはWeb上でのシラバス相互チェック体制が構築され、兼任教員の科目については懇談会を実施して適切性の検討が行われている。授業がシラバスに沿って行われているかについては、授業改善アンケートを基にして教室会議などで検証されているほか、学科によっては、学期ごとにシラバス合致度をチェックし、80%未満の科目について教員に説明を求める取り組みが行われている。

また、卒業発表会には学部生の全員が参加し、加えて各学科の初年次授業において卒業テーマが紹介されるなど、卒業研究へと至る道筋が学生に明示されている。

以上のことから、教育システムが適切に運用されていると評価できる。

### ④学習成果・教育改善に関すること (2.5~2.7)

生命科学部の成績評価の方法や基準はシラバスに明記され、学生に周知されている。評価結果については学生からの異議申し立てのシステムが確立されている。他大学等における既修得単位の認定は実施されていないが、引き続き検討を期待したい。成績評価については各教員に任されており、その方針等については検討が必要とされているものの、概ね前もって明確な採点基準を決めそれに基づいて評価を行うことで厳格な成績評価が担保されている。多人数で評価を行う科目については教員間でばらつきが出ないよう教室会議等で調整が行われていることから、厳格公平な成績評価が行われていると評価できる。

学生の就職・進学等の状況については、各学科とも調査を担当する教員を決め、調査結果を教室会議などで全教員が共有している。実験・演習科目の成績判定を全教員で行うことにより成績分布に関する情報を共有するほか、教室会議などで進級や卒業の情報が共有されている。学科ごとに異なるが、統一テストやアンケートによる可視化が行われているほか、技術士一次試験合格者、樹木医補・自然再生士補登録者数を指標として可視化が行われており、評価できる。

学習成果の定期的な検証はテストやアンケートなどで実施され、さらに各学科の教室会議において授業報告が行われ、改善方法について議論が行われている。

また、授業改善アンケート結果は自由記述欄の詳細情報を入手し、学部執行部により全専門科目の実施状況が把握されている。

## 3 学生の受け入れ

### 【2017年5月時点の点検・評価】

#### (1) 点検・評価項目における現状

##### 3.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

#### 【学生の受け入れ方針】

生命科学部では以下を学生の受け入れ方針とし、さらに学科ごとに詳細を定める。

1. 入学後の修学に必要な数学や理科(物理, 化学, 生物, 地学)の基礎知識や基礎実験技術を備えている。
2. 入学後の修学に必要な言語能力(特に日本語・英語)と、社会や文化についての知識を有する。
3. 学問を貪欲に吸収し、科学技術の進歩を社会に生かそうとする積極性と意欲を有する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

4. 物事を論理的に幅広く考察することができる。

生命機能学科：

21世紀の生命科学は、従来の枠組みを超える学際的な学問へと展開している。したがって、専門的知識を幅広くかつ正しく理解し、応用できることはもちろん、日本語および外国語を用いたコミュニケーション能力をもち、人文学や社会科学の素養を踏まえた幅広い視野をもつ人材が望まれる。本学科では、以下のような入試制度を設置して、さまざまな経路から熱意のある有為な学生を広く募集し、学生の多様性を高め、学生どうしの相互啓発を促し、教育効果の促進を図る。

●一般入試(A方式入試, T日程入試, 英語外部試験利用入試および大学入試センター試験利用入試)

A方式では、英語、数学と理科の成績によって、総合的学力を評価する。

●推薦入試(指定校推薦入試, 付属校推薦入試, スポーツに優れた者の特別推薦入試 等)

出願書類及び面接等によって、基礎学力と学習意欲、生命科学に対する関心と自発性、創造性を評価する。

●特別入試(外国人留学生入試, 帰国生入試 等)

出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と生命科学に関する基礎学力を有すること、生命科学に対する関心と自発性、創造性を評価する。

環境応用化学科：

創造性を高め、相互に琢磨する教育環境を構築し、多様な素質を持った学生を受け入れるために、下記のような入試制度を設けている。入学後の学生の追跡調査により、これら入試制度のより適切な運用、改善に努めている。

●一般入試(A方式入試, T日程入試, 英語外部試験利用入試および大学入試センター試験利用入試)

A方式では、英語、数学と理科によって、基礎的な学力と、化学及び自然科学における問題解決能力を評価する。

●推薦入試(指定校推薦入試, 付属校推薦入試, スポーツに優れた者の特別推薦入試 等)

出願書類及び面接等によって、基礎的な学力と学習意欲、化学への関心と、化学及び自然科学における問題解決への意欲を評価する。

●特別入試(外国人留学生入試, 帰国生入試 等)

出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と化学に関する基礎学力を有すること、化学及び自然科学における問題解決への意欲と本学科への志望意思を確認する。

応用植物科学科：

植物は人類が地球上で生存していく上で必要不可欠な生物であるとの認識のもと、食料、資源、環境問題に関心を持つ意欲あふれる次のような学生を受け入れることを基本としている。

- ・最新の生命科学の知識を食欲に吸収し、科学技術の発展を通じて社会に貢献しようとする学生
- ・現代社会のかかえる広範で深刻な問題を、柔軟な思考と実践的な能力を基礎にして解決しようとする研究・技術者を目指す多様な学生
- ・国際的な視野で食料、環境問題や、貧困や飢餓問題に勇敢に挑戦し、解決に向けて国際舞台で活躍しようとする意欲ある学生

●一般入試(A方式入試, T日程入試, 英語外部試験利用入試および大学入試センター試験利用入試)

A方式では、英語、数学と理科が受験科目であるが、「数学」、「理科」の2教科のうち得点の高い1教科のみを合否判定に用いることによって、特定分野に秀でた能力を評価する。

●推薦入試(指定校推薦入試, 付属校推薦入試, スポーツに優れた者の特別推薦入試 等)

出願書類及び面接等によって、基礎的な学力と学習意欲、植物医科学への関心と、食料・資源・環境分野における問題解決への意欲を評価する。

●特別入試(外国人留学生入試, 帰国生入試 等)

出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力や生命科学に関する基礎学力、食料・資源・環境分野における問題解決への意欲、および本学科への志望意思を有することを確認する。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

はい  いいえ

3.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

はい  いいえ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

(～200 字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

2012 年度に 1.18 倍の収容定員の超過, 2014 年度に 1.14 倍の入学定員の超過があったものの過去 5 年概ね適正な充足率となっている。入学定員が超過した場合には, クラス分けを行って講義受講者数の適正化を行うとともに, 学科ごとに超過分に応じて予算措置を講ずるなどして実験実習に支障が出ないようにしている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・教授会資料

定員充足率 (2012～2016 年度)

(各年度 5 月 1 日現在)

種別\年度	2012	2013	2014	2015	2016	5 年平均
入学定員	200 名	212 名	230 名	230 名	230 名	
入学者数	200 名	198 名	263 名	224 名	243 名	
入学定員充足率	1.00	0.93	1.14	0.97	1.06	1.02
収容定員	800 名	812 名	842 名	872 名	902 名	
在籍学生数	947 名	899 名	928 名	897 名	935 名	
収容定員充足率	1.18	1.11	1.10	1.03	1.04	1.09

### ※ 1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去 5 年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】 ※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学, 社会福祉に関する分野を含む)	1.20 以上	1.25 以上
上記以外の分野	1.25 以上	1.30 以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告
すべての分野共通	0.9 未満	0.8 未満

### ※ 2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上
収容定員超過率	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上

3.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また, その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い, その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法, 改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

- ・学部執行部と入学センターの情報交換会により, 入試結果を分析・検証するとともに, 得られた分析結果を各学科が翌年以降の入試改善のために利用している。
- ・各学科で入試経路(一般, センター, 推薦)ごとに学生のその後の成績等を追跡し, 入学選抜の適切性を検証するとともに, 指定校設定を見直すなどの改善を行っている。
- ・応用植物科学科では, 指定校推薦で入学した学生について GPA や TOEIC-IP, プレースメントテスト等の成績を追跡し, 指定校設定を見直している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・入学センター情報交換会資料
- ・各学科教室会議(教員会議)議事録
- ・指定校推薦見直し委員会開催記録・議事録

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・生命科学部では、3つのポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）の見直しをおこない、改訂後のアドミッションポリシーを2018年度学生の受け入れに反映させる体制を整えた。	3.1①

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・2017年度の一般入試では、受験者数が学部全体で増加し、入学者数については応用植物科学科で2016年度に続き定員超過した一方、環境応用化学科で定員を下回った。安定的に適正な入学者数を確保する方策を入学センターと連携しながら、検討する必要がある。</li> <li>・入試経路別の入学後の成績追跡調査については学科毎に調査の詳細さにばらつきがあったため、2017年度は学務と提携して、全学科の全在生について、プレースメントテストの成績、およびその後の成績推移データを統一的に収集し、各入試経路の有効性、および学習成果について、検討をおこなうこととした。</li> <li>・推薦入試のうち、特に付属校から入学した学生に学部で求める学生像とのミスマッチがみられた。今後、付属校との連携を深め、生命科学部の魅力を伝えると共に、求める学生像をより積極的に周知して優秀な学生を確保する方策を検討する必要がある。</li> </ul>
---

【この基準の大学評価】

生命科学部の学生の受け入れ方針は適切に設定されている。定員については、5年間の平均で1.02倍の超過となっており、適切と認められる。定員超過の場合には、クラス分けなどを通じて実験実習等における学習成果が低下しないように対応されている。入学センターとの情報交換会により、入試結果を分析・検証し、翌年の入試改善に利用しているほか、入学経路ごとに学生の成績を追跡調査し、入学選抜の適切性を検証している。
--

4 教員・教員組織

【2017年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	
<p><b>【求める教員像および教員組織の編制方針】（2011年度自己点検・評価報告書より）</b></p> <p>理念・目的で示される「生命」、「環境」、「物質」の領域に応じて組織された2学科、2専修（生命機能学科生命機能学専修、同学科植物医科学専修、および環境応用化学科）での「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、および「アドミッション・ポリシー」に立脚した教育研究を多様な形で学生に指導、支援できるように努める教員を求める。従って、教員組織の編制に関わる方針は、生命機能学専修では、「生体を構成するタンパク質・ゲノム・細胞から、生命をそれらの有機体として捉え、かつ、これらの学問領域での先進的教育と研究を実践できる教員」を、植物医科学専修では「植物医科学分野で最先端の知識・技量と豊富な経験を有し、資格取得のサポートもできるような実践的教育・研究を遂行できる教員」を求める。環境応用化学科では、「21世紀型先端化学を修めることができるような、グリーンケミストリーを基礎理念として、有機化学、無機化学、物理化学、環境化学、化学工学各分野をバランスよく習得していることを要件とし、更に、境界領域までカバーするような教員」を求める。このような教員像に基づき教員組織の編制がなされている。</p>	
①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p><b>【根拠資料】</b>※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部教員審査内規</li> </ul>	
②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在を明確にしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<b>【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】</b> ※箇条書きで記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・学部執行部は学部長，教授会主任，教授会副主任1名ずつよりなる。
- ・教学関係を含め重要な案件は，各学科主任および学部担当事務主任を含めた執行部会議での議を経た後に，教授会に上程して改めて議論し，決議する体制をとっている。
- ・学科の独自の問題に関しては，各学科の責任で検討が行われ，原則として全教員が参加する教室会議により意志決定がなされる。
- ・教養教育を担う組織として小金井リベラルアーツセンターがあり，学部組織と連携して教養教育の責務を担っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部教授会規程
- ・生命科学部執行部会議・教授会議事録

4.2 教員組織の編制に関する方針に基づき，教育研究活動を展開するため，適切に教員組織を編制しているか。

①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

はい  いいえ

(～400字程度まで) ※教員像および教員組織の編制方針，カリキュラムとの整合性，国際性，男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

生命機能学科の3分野別の教員数は，2016年5月現在，ゲノム分野が2名，蛋白質分野が3名，細胞分野が4名の配置である。今後の大学院卒や定年交代の人事，任期付き教員の期限後の人事に際しては，分野別の配置のバランスを保つよう配慮していく予定である。環境応用化学科では，3つのコースすなわち，物質創製化学コース，グリーンケミストリコースおよび環境化学工学コースに分かれ，それぞれ，物理化学，有機化学，無機化学，環境化学および化学工学の5分野に対応する教員が担当している。応用植物科学科では，学科設置準備委員会の議論において，植物医科学を支える分野を考慮し，各種の微生物病，害虫，生理病，社会科学の各分野の専門家からなる教員体制とした。しかし，学科の教員のうち1名は任期付教員の立場である。将来にわたってさらに充実した専門教育を提供するには，今後の教員定員枠の拡充などが望まれる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・法政大学生命科学部設置の趣旨等を記載した書類
- ・生命科学部教員一覧
- ・法政大学ホームページ
- ・学部・研究科・各学科のホームページ・パンフレット
- ・2016年度専任教員数一覧

②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

はい  いいえ

(～400字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

教員組織は，学部教員が大学院の主要科目を担当し研究指導を行う体制であり，連携が取れている。学部時代の研究テーマを大学院でも続けて行うことにより，高度な研究を行って学会発表するなど成果を挙げている。また，担当教員が許可することで学部4年生が大学院科目を「先取り」受講することが可能であり，連続性のある教育体制となっている。各学科においてそれぞれの教員が大学院業務を分担し，教員や大学院修了生・上級生による大学院進学に関する説明会の実施など大学院教育との連携を推進している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学院 理工学・工学研究科要項
- ・生命機能学専攻・応用化学専攻入試結果

2016年度専任教員数一覧

(2016年5月1日現在)

学部（学科）	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任教 員数	うち教授数
生命機能	7	2	0	1	10	8	4
環境応用化	11	0	0	0	11	8	4
応用植物科	7	1	1	1	10	8	4
学部計	25	3	1	2	31	24	12

専任教員1人あたりの学生数（2016年5月1日現在）：30.2人

③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

はい  いいえ

【特記事項】(～200字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し，回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は，前年度から「S：さらに改善した，A：従来通り，B：改善していない」を意味する。

生命機能学科および環境応用化学科では、2012～2016年までの5年間に複数教員の定年による交代があり、その後任人事には年齢構成を配慮した人事が行われ、偏りは十分に改善された。引き続き、後任人事採用に当たっても、年齢に偏らないように配慮していく予定である。応用植物科学科では、学科設置準備委員会で2014～2017年度までの教員採用を決定しており、完成年度までに適切な配分の年齢構成となるように計画されている。

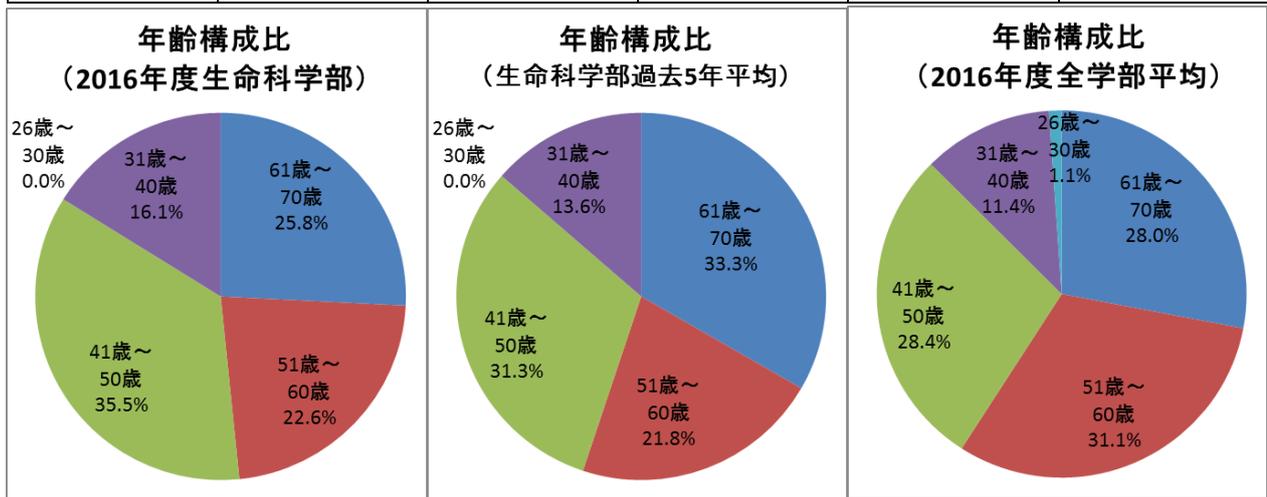
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部教員一覧
- ・生命科学部応用植物科学科設置の趣旨等を記載した書類

年齢構成一覧

(2016年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2016	0人	5人	11人	7人	8人
	0.0%	16.1%	35.5%	22.6%	25.8%



4.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

①各種規程は整備されていますか。

はい  いいえ

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。

- ・生命科学部教員審査内規
- ・生命科学部教員資格に関する内規
- ・生命科学部教授、准教授および専任講師資格に関するガイドライン

②規程の運用は適切に行われていますか。

はい  いいえ

【募集・任免・昇格のプロセス】※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。

- ・教員の採用（募集・任免）および昇格に関する審査は、「生命科学部教員審査内規」に従って、採用は原則公募によるものとする。
- ・候補者については推薦委員会（5名以上の専任教員で構成）および人事委員会（各学科2名ずつの専任教員で構成され、当該学科以外の教員が委員長となる）を通じて二段階の精査を行う。
- ・最終的に教授会で投票による議決（当該職位以上の教員が投票権をもつ）を行っている。

4.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。

S  A  B

【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。

- ・全学の「FD推進センター」で実施される授業改善アンケートに加え、各学科独自に授業アンケートを実施。
- ・2011年度より授業公開を実施。法政大学の全教職員に対して公開しており、教員が相互参観を行うとともに、特任教育技術員、教育技術嘱託など技術系職員が参観。
- ・FDアンケート等の結果を各教員にフィードバックし、授業の質の改善に活用するシステムを整備。
- ・シラバスチェックシステムを各学科で整備。

【2016年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業公開：2016年度は、春学期（6月6日～7月2日）と秋学期（11月7日～12月3日）に授業公開・参観を行った。春学期は公開94科目・参観27科目、秋学期は公開91科目・参観23科目であった。</li> <li>・シラバスチェック：年度末にかけて、執行部と各学科で開催した。</li> </ul>
<p><b>【2016年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業公開の意図について、兼任講師陣の理解が深まり、授業公開科目が前年度春74、秋82科目から春94、秋91科目へと増えた。理工学部教員からの参観者も得てより広い意見を得ることができた。</li> </ul>
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各学科授業アンケート</li> <li>・執行部会議、教授会資料</li> <li>・各学科教室会議（教員会議）議事録</li> </ul>

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2017年度4月に教養教育を担当する教員（数学と英語）を2名、理工学研究科生命機能学専攻の大学院教育に携わる任期付き教員1名を新規に採用した。このことにより、より充実した教養教育および学部・大学院教育を推進できる体制となった。2018年度、さらに物理系の教養教育を担当する教員を1名新規に採用する予定である。</li> </ul>	4.2①
<ul style="list-style-type: none"> <li>・2017年4月に学部主催で新任教員によるセミナー、新任教員歓迎会を実施し、学科間の交流、相互理解を深めることにより、より充実した教員組織を構築することを図った。</li> </ul>	4.2①

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・特任教育技術員、教育技術嘱託など技術系職員の待遇改善に取り組む。</li> <li>・在外・国内研究員制度の活用を図る。今後、学部・学科において研究員として派遣できる体制を整え、教員の資質・モチベーションの向上を図る必要がある。</li> </ul>
---

**【この基準の大学評価】**

<p>生命科学部の採用・昇格の基準において、教員に求める能力や資質等が明らかにされている。学部執行部や学科主任を中心とする役割分担が明確にされている。各学科とも分野ごとに適切な人数の教員が配置されており、カリキュラムにふさわしい教員組織になっている。学部教員が大学院の主要科目を担当し研究指導も行うことから、学部から大学院へと同じテーマで研究を続けることも可能で、研究の高度化に役立っている。また、大学院科目の先取りによって連続性のある教育体制が実現されていると評価できる。</p> <p>年齢分布を考慮した採用人事を行うなど、特定の範囲の年齢に著しく偏らない配慮がなされている。</p> <p>教員の募集・任免・昇格に関しては審査内規、資格内規、ガイドラインが整備されており、採用は内規に則り、原則公募で行われており適切である。</p> <p>授業を公開し、教員が相互に参観を行う体制を整備し、アンケートを実施するなど、FD活動が適切に行われていると評価できる。</p>
--

5 学生支援

**【2017年5月時点の点検・評価】**

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。	
①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい いいえ
<b>【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】</b> ※簡条書きで記入。	
・生命科学部では、執行部会議・教授会で卒業・卒業保留・留年者および休・退学者が報告され、状況が把握されている。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部では、卒業論文の提出および発表が学位取得に必須であり、全教員の判定のもとに適切に行われている。</li> <li>・退学、休学については教室会議で報告され、留年する学生については、年度末の教室会議において確認され、次年度の留級生ガイダンス時に適切な指導を行っている。</li> </ul>		
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・執行部会議、教授会議事録</li> <li>・各学科教室会議（教員会議）議事録</li> </ul>		
<p>②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。</p>		S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400 字程度まで) ※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスマワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。</p> <p>生命科学部全教員がオフィスマワーを設定しており、その時間帯は教員に対して学生が自由に相談できるようになっている。また、学生がより気軽に相談できるように、上級生が下級生を教えるチューター制度を設定している。さらに実験実習科目を中心として大学院生が学部生をきめ細やかにサポートするティーチングアシスタント制度も実施している。生命機能学科では、1, 2, 3 年生のクラス担任と実験・演習科目の担当教員を置き、学生と高頻度で顔を合わせ、教員側の窓口としての役割を担っている。また、これとは別に学生担当教員が個々の学生の成績などを調査し、規定単位の取得が危ぶまれる学生や成績が低下しつつある学生などについて、面談や必要に応じた保護者への連絡などを行い、学生が留級に至らないようサポートを行っている。環境応用化学科では3, 4 年次での指導教員の割り当てに加えて、1 年次には8 名程度ごとのクラス担任制度を導入している。また、特任教育技術員が主要講義科目、実験・演習科目に出席し、それぞれの教育内容を把握しており、教員だけでなく特任教育技術員も学生からの質問に対応できる体制を整えている。応用植物科学科では、1, 2, 3 年生のクラス担任と実験・実習科目の担当教員を割り当て、高頻度かつ緊密に指導している。特に、1 年生に対する生産実習においては、作物(2016 年度はキュウリ)の病害虫発生調査・管理等を1 時限前に教員、特任教育技術員が高頻度に指導している。また、教員会議において、成績不良学生、休みがちな学生の情報を共有し、成績調査、個人面談などの就学支援サポートを行っている。</p>		
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部履修の手引き</li> <li>・学科教室会議（教員会議）議事録</li> <li>・応用化学基礎シラバス、基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB, IIAB テキスト</li> </ul>		
<p>③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。</p>		<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p><b>【成績不振学生への対応体制および対応内容】</b> ※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部では、2014 年度より「累積 GPA が 1.0 以下または学習態度や達成度に重大な問題があると認められる者」を成績不振学生と定義し、とくに注意して対応している。「学習態度や達成度」に関しては、修得単位数、授業への出席率、レポート等課題提出状況、GPA をもとにして総合的に判断する。とくに、必修の実験実習科目の出席状況やレポート等課題提出の状況は、学生の学習意欲と理解度をリアルタイムに反映する重要な指標と考えているため、学期途中にも適宜モニターして対応する。この対応のため、各学科に学生担当教員をおいている。</li> <li>・生命機能学科では、学生担当教員は、学科主任等と連携して、上述の基準から問題となる学生の調査・対応を主導する。当該学生に対しては、メールもしくは文書による本人への注意喚起、個人面談、郵送による保証人への通知を含めた個別指導を行う。学生担当教員と基礎実験演習担当教員を中心に、成績が不振な学生の状況を教室会議で共有するとともに、必要に応じて個別に面接を行い、きめ細かい指導をしている。また、成績不振など問題を抱える学生の状況は出来る限り学務課とも共有している。</li> <li>・環境応用化学科では、成績不振な学生の情報を教員間で共有し、必要に応じて、各教員が呼び出しを行い、注意を喚起するとともに、指導を行うなど適切に指導を行っている。また、年度始めに留級生ガイダンスを実施し、特に成績不振な学生へのサポートを行っている。</li> <li>・応用植物科学科では、教室会議で「GPA1.0 以下の学生、実験実習（全 15 回）で 4 回以上欠席した学生、実験実習でのレポート未提出者、1～3 年生の進級要件を満たさそうにない単位数少修得者、4 年生の卒業要件不足見込み者」などを成績不振学生としてリストアップし、全教員で情報を共有した上で、優先的にケアしている。また、「学生問題担当教員」を設置し、各学年担当教員 2 名、さらに必要に応じて学務課・学生生活とも連絡をとりつつ、成績不振者を指導している。</li> </ul>		
<p><b>【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】</b> ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命科学部では、学習態度、学習能力に大きな問題を抱える学生に対して、学科だけではなく、学務課、学生センター、学生相談室、障害学生支援室と連携する体制を整え、学習に困難を抱える学生に対して多角的な観点から手厚くサポートすることが可能になった。</li> </ul>		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各学科教室会議（教員会議）議事録</li> <li>環境応用化学科留級生ガイダンス案内</li> </ul>	
④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。	S A B
<p>（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。</p> <p>生命科学部執行部では、小金井企画・調整会議に「小金井キャンパスにおける留学生の対応について」との提言を行い、日本語教育、医療連携、学生相談などの対応が検討されている。生命機能学科では、学科主任が4月に留学生を集めて、履修の説明や大学生活について説明を行い、学生間の情報交換を促している。環境応用化学科では留学生について教室会議で情報共有を行い、各科目でのサポートに活かしている。応用植物科学科では、2016 年度入学のベトナム人留学生（博士課程）に対して、学科を挙げて修学支援に力を入れている。</p>	
<p><b>【2016 年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】</b> ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>小金井で学ぶ留学生に対する学生相談室を主体とする学生相談フローの作成に支援を行い、留学生が修学に問題を抱えた際の支援システムが稼働開始した。</li> </ul>	
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>小金井企画・調整会議議事録</li> <li>小金井学生相談・支援室運営委員会議事録</li> <li>学科教室会議（教員会議）議事録</li> </ul>	

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし。	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・留学生のサポートを強化するためガイダンスなどの実施を検討している（環境応用化学科）。
---

**【この基準の大学評価】**

<p>生命科学部では、卒業・卒業保留・留年者および休・退学者は教室会議や教授会で把握されている。オフィスアワー、チューター制度、ティーチングアシスタント制度を利用した修学支援が行われている。学科にもよるがクラス担任制度を導入し、成績不振に陥る前に面談等の対応が取れる体制となっている。成績不振学生に対しても教員間で情報を共有し、個別面談・指導を通して優先的にケアする体制が構築されており、適切に対応されている。</p> <p>留学生への修学支援に関しては、日本語教育、医療連携、学生相談などでの支援が検討されており、それに基づいて、教員間での情報共有が行われており評価できる。2017 年度からは留学生を対象としたチューター制度が設けられ、その効果が期待される。</p>
---

**IV 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況**

評価基準	教員・教員組織
現状の課題・今後の対応等	<ul style="list-style-type: none"> <li>特任教育技術員、教育技術嘱託など技術系職員の待遇改善に取り組む。</li> <li>在外・国内研究員制度の活用をはかる。今後、学部・学科において研究員として派遣できる体制を整え、教員の資質・モチベーションの向上を図る必要がある。</li> </ul>
年度末報告	<p>生命科学部では、技術系職員の待遇改善のために関係部署との話し合いを続けている。在外・国内研究員制度の活用については、学部の将来構想委員会において話し合い、今後、クォーター制導入などの機会をとらえ、特にカリキュラム構成に配慮することなどを話し合った。</p> <p>さらに、学科において以下の取り組みがなされている。</p> <p>生命機能学科では、技術系職員の待遇改善については教室会議や将来構想委員会で議論し、教育職への移行を要望している。また、在外・国内研究員制度の活用をはかるために、教室</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		<p>会議や学科内の将来構想委員会で議論しているが、学生を研究室に配属している現状から長期での派遣は難しいため、短期での派遣を検討することとした。</p> <p>環境応用化学科では、2017年度以降の教育体制を検討する会議を発足させ、その中で特任教育技術員の職務内容、教育効果について検証を行うとともに、特任教育技術員の制度見直しについて議論を行っている。また、在外・国内研究員制度の活用をはかるために、専任教員が研究員として派遣できる体制構築に向けた検討を行っている。</p>
	質保証委員会による点検・評価	<p>技術系職員の待遇改善は、制度の大きな変更を必要とするが、現状は可能な範囲の対応を行っていると評価できる。しかし、特任教育技術員（以後、技術員）の処遇に関しては、各学科で業務内容が異なり、問題点の所在が明確ではない。今後は執行部を中心に、</p> <p>①技術員の役割を明確にする。  ②修士取得者が担当する業務の範囲を明確にする。  ③任期付きでなく、パーマネント雇用を可能とする。  ④教育とともに研究を行えるポストとする。  ⑤博士号取得、教員への登用制度を設ける。</p> <p>など、新たな人事ルートの構築を検討するべきである。</p> <p>国内・在外研究員制度の活用に関しては、①教員一人当たりの学生数を減じた上で、②短期国内留学制度を構築するのが現実的ではある。しかし、これを完成形とするのではなく、海外滞在を含む1年間の在留を視野に入れながら、制度の構築に着手すべきである。</p>
	評価基準	教育課程・教育内容
	現状の課題・今後の対応等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院修了生による大学院修了後のキャリア説明会に兼任講師懇談会で提言のあったパネルディスカッション方式を取り入れる（生命機能学科）。</li> <li>・社会で活躍する本学科卒業生を講師とした「環境応用化学科キャリア講座」を定期的で開催し、キャリア教育をより充実させる（環境応用化学科）。</li> <li>・就職やインターンシップ志望者にとって必要となる、社会的なマナー、メンタルケア等に関する講座を年1度行ってきたが、それを維持し、内容をさらに充実したものとなる様検討する。（環境応用化学科）。</li> <li>・キャリア教育については、資格取得の一層の奨励と、インターンシップ受け入れ先に食品企業・農業生産現場等をさらに広げる（応用植物科学科）。</li> <li>・公務員試験等合格者数を増加させるための、合格体験者の先輩による講演など指導強化を行う（応用植物科学科）。</li> </ul>
	年度末報告	<p>生命科学部では、各学科において以下のように取り組んでいる。</p> <p>生命機能学科では、大学院修了生による大学院終了後のキャリア説明会をすでに大学院を修了して働いている者だけでなく、就職内定者の就職先の企業による説明を加えることにより、会社側と学生側からの両方の視点による説明会とすることにより、在学生に対して大学院進学の特典等をアピールすることができた。</p> <p>環境応用化学科では、2016年9月21日に社会で活躍する本学科(前身の物質化学科)卒業生を講師とした第4回環境応用化学科キャリア講座を開催し、100名程度の在学生が同講座に参加した。</p> <p>応用植物科学科では、キャリア教育について、資格取得を引き続き奨励した結果、本年度の技術士1次試験に67名が合格し、過去最高を更新した。インターンシップ学生の受け入れ先について新規開拓を行った結果、今年度は農業系や試験場などの受け入れ先が4件増加した。また、昨年に引き続き今年度も2年生、3年生を対象にキャリアアップガイダンスを実施し、卒業生らによる講演など指導強化を行った。</p>
	質保証委員会による点検・評価	<p>各学科において、キャリア教育を充実させるため、積極的な取り組みが展開されている。大学・執行部には、そのような取り組みに対する、財政的な支援を検討し、予算化のための具体的方策を望みたい。</p> <p>生命機能学科・応用植物科学科のキャリア説明会および、環境応用化学科のキャリア講座において、それぞれ就職内定者の就職先の企業担当者や、卒業生を講師として迎える試みがなされていることは、学部生が就職および大学院進学を考える上で、重要な情報源となっているものと評価できる。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

評価基準		教育方法
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> <li>・3学科体制となり、教員、学生の教育・研究スペースや応用植物科学科の圃場の確保が課題である。</li> <li>・取り組んでいる厳格で公平な成績評価を学科全体に導入する（生命機能学科）。</li> <li>・アンケート調査を継続して実施するとともに、アンケート内容の改善や学生からのヒアリングの導入を検討する（応用植物科学科）</li> </ul>
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<p>応用植物科学科の圃場確保は引き続きの課題となったが、生命科学部では各学科以下のように取り組むとともに、学生の試験時間等における不正防止など、重要事項については学部執行部会議等で話し合った。</p> <p>生命機能学科では、公平な成績評価を導入するために、基礎実験や基礎英語等では平常点やレポート点、中間試験や期末試験を点数化し、それぞれの案分を考慮して成績を評価した。さらに、評価の年次変化を記録し、より厳格な成績評価を行った。</p> <p>環境応用化学科では、2016年度末に2名の専任教員が退職されるのを機に、2017年度以降の教育方法・教育体制について検討を行った。その結果、1名の専任教員および2名の任期付教員(助教を含む)の公募を行い、採用することとなった。また、環境応用化学科の主要専門科目である学生実験の教育効果についても検証し、より教育効果を高めるため、3年次から4年次への進級基準の改正を行った。</p> <p>応用植物科学科では、狭隘な実習圃場(100㎡)を拡充するための重点施策事業として予算要求を行ったが、残念ながら本学当局によって不採択となった。本学科の場合、こうした実践的な教育環境の整備がなければ社会に有用な実践的人材の養成に重大な支障をきたす恐れがある。また、今年度もアンケート調査を実施し、教員会議で結果を分析した。</p>
	質保証委員会による点検・評価	<p>各学科において独自の取組みが行われており、多くの成果が認められる。学生別の支援の向上には、その基礎となるデータベース構築(学生カルテ制度)を検討することも考慮すべきである。</p> <p>生命機能学科では、2年生から研究室に配属可能なシステムを維持するためのスペースの確保が難しくなっている。また、環境応用化学科では、2017年度に赴任予定の新任(任期付き)教員の居室の確保ができていない。このように教員、学生の教育・研究スペースの不足は深刻である。これについては、理系学部で問題点を共有し、問題の克服にむけて、早急に検討すべきである。</p> <p>また、応用植物科学科の圃場に関しては、大学評価委員会からの指摘もあり、早急に実現すべきである。</p>
評価基準		成果
現状の課題・今後の対応等		<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学科で成績分布や進級などの状況を教員全体で共有する体制を継続することで、成績不振学生を早期に把握するように引き続き努める。</li> <li>・2013年度からの新カリキュラムを履修した学生の卒業論文は、「生命機能学研究論文」履修者のみ口頭発表、それ以外の学生はポスター発表という形式に変更することにした。2016年度末に初めての発表が予定されており、今後、この発表形式の変更に対する教育効果について検討する(生命機能学科)。</li> </ul>
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	<p>生命科学部では、以下のように取り組んだ。</p> <p>生命機能学科では、卒業論文の発表形式を変更したことにより、卒業研究全体のレベルを落とすことなく、生命機能学研究論文を履修した意欲のある学生に、より高度な研究を行わせることができるようになった。</p> <p>環境応用化学科では、継続的に教室会議において、全専任教員による授業報告を定期的に行い、学生の理解度についての検証を行うとともに、成績不振学生についての情報共有を行っている。</p>
	質保証委員会による点検・評価	<p>学部全体として、授業内容の改善、卒業研究指導に力を入れており、十分な成果が認められる。</p> <p>生命機能学科では、卒業論文の発表形式を口頭またはポスターから選択できるようにし、学生の意欲に応じた研究指導を行うようになった。今後も継続して教育効果を検討する必要がある。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

		ある。 環境応用化学科の教員による授業報告は、教育技術の確認ならびに、教員間で学生（特に生成期不審者）の情報を共有するための試みとして、継続されている点が評価できる。
評価基準		学生の受け入れ
現状の課題・今後の対応等		・3学科体制になり入学定員が増加し、さらに定員を大きく上回る学生が入学することがある。2016年度は応用植物科学科で学生実験等対処が必要となった。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	以下に示すように、生命科学部では各学科において実験機器や場所の確保に取り組んでいるが、今後も実験・実習を重視する学部理念を損なうことのないように対処したい。 生命機能学科では入学定員を大きく上回った学年が3年生となり、すべての学生が研究室配属されることにより、実験・研究設備の不足が問題となりつつある。さらに次年度は卒業研究を主体的に行うため、より大きな問題になる可能性がある。そこで、共通機器室の壁工事を行い研究設備の整備を行って学生増加に対する対応を行った。 環境応用化学科では、主要専門科目である1-3年に配置されている学生実験科目の安全かつ効果的な実施方法について検討を行い、これまで各研究室で行ってきた学生実験科目を2017年度以降は学科共通実験室および化学実験室を活用して行うこととした。 応用植物科学科では定員を大きく上回る学生が入学したが、定員超過に伴う予算要求が全面的に認められたため、不足分の機器や試薬を購入し、学生実験等を無事実施することができた。
	質保証委員会による点検・評価	各学科ともに、研究室のスペース不足が限界となりつつある。新たな研究実験棟の建設に関する具体的な検討に入る時期に来ている。 実習用・研究用大型機器の老朽化が始まっており、間もなく同時に更新の時期を迎えることになる。計画的な更新、買い替え、新規導入に向けて、複数年に渡る予算化を検討する時期にある。
評価基準		学生支援
現状の課題・今後の対応等		・引き続き学生指導での質の保証、授業内不正行為への対応などの課題に取り組む。 ・各学科実験実習科目への取り組みに不安がある学生について、学科で早期に発見し、その対策を引き続き行う。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	各学科において以下の取り組みを行っているが、学部としても、外国人留学生支援等継続して取り組みたい。 生命機能学科では、取り組みに不安がある学生に対しては、教室会議で毎回議論することにより、早期発見を行った。また、適宜学科主任と学生担当教員が面談を行い、早期の対策を行った。また、障害学生支援室や学生相談室とも連携することにより、学生問題に対する対応を行った。 環境応用化学科では、授業内不正行為についての防止策について教室会議で行う授業報告の中で定期的に意見交換を行っている。また、成績不振者については、学科主任、授業担当者等が適宜学生を呼び出し、面談を行うなどして対応している。また、学生への精神面でのケアを充実させるため、2017年度より、4月に行う各学年のガイダンスにおいて学生相談室の心理カウンセラーによる心理教育を実施することとした。 応用植物科学科では、出席・授業態度に問題のある学生数名について、担当教員が面談や電話による相談・指導を行った。また教員会議において、学生指導に関する情報を共有するとともに対応策を話し合った。
	質保証委員会による点検・評価	各学科ともに。成績不振学生に対する支援体制は整えられている。ただ、成績不振学生の中には精神的な不調を原因とするケースがあると思われ、これらの学生に対する日常的な支援は指導教員が担当している。教員と心理カウンセラーとの会合を通じて、支援のノウハウを共有する体制を検討すべきである。 また、取り組みに不安のある学生、障害学生支援室から配慮を求められた学生に対し、学科内で定期的に対応を協議している点は、高く評価される。

#### 【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

技術系職員の待遇改善問題、圃場および教育・研究スペース不足を改善するための取り組みに関しては、3学科体制の発足時からの問題解決に大変な努力をされていると推察する。教育課程や教育内容に関する取り組みは、現状行われているものを評価した上でより強化・改善する方向で対応が検討されたもので、成果が上がっていると認められる。特に、キャリア教育に関しては興味深い取り組みがあり、他の学部との模範になると評価できる。

#### 【大学評価総評】

生命科学部が3学科体制になって初めての卒業生を出すにあたって、実験・演習や卒業研究など、実践的でより綿密な指導によってコミュニケーション能力や実践的な問題解決能力をつけさせたいという意気込みが感じられる取り組みがなされており、評価できる。特に大学院進学にも配慮したキャリア教育に力を入れており高く評価できる。生命・環境・植物の各学科はそれぞれ特徴のある取り組みを行っているが、さらに互いの連携を強化し、学科としての特色を保ちつつ学部としても大きな成果が得られるよう改善に努めてほしい。

生命科学の分野は進歩の速度が速く、学生に教える内容も年々変わっていく必要がある上、学生の気質も年ごとに変化していくことから、学生の学習達成度等を詳細に把握しつつ、学位授与方針を確実に達成できるような最適なカリキュラムをどう設定していくかが今後の大きな課題になり、そのような点で学生を主体とするような取り組みが増えていくと推察される。教員組織や教育研究スペースなど限られた資源を有効に使うことで着実な成果を挙げられるよう、今後の学部や学科の充実・発展に期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。